

第93回麻布獣医学会 一般学術演題8

兵庫県内3酪農場のRS感染症発生状況と抗生物質の使用低減

○菅 保礼

兵庫NOSAI淡路基幹家畜診療所三原診療所

【背景】 ウシRSウイルス感染症（以下RS）は牛呼吸器病候群（以下BRDC）の重要なトリガーファクターであり、飛沫感染により急速な牛群内流行を引き起こす。一般的には発症後2週間程度で自然に回復するとされるが、下部気道への感染によって重度の間質性肺炎となり、細菌の2次感染によってBRDCとなり重篤な症状を呈し死に至る場合もある。そのため治療や感染拡大防止のため抗生物質が使用されることも多い。しかし、畜産物生産における動物用抗菌性物質製剤の慎重使用に取組むためには、RSの発症傾向を調べ、不必要な抗生物質の使用を控えることが重要である。

【目的】 酪農場のRS流行時における発症傾向調査と抗生物質使用を控えた対応方法の検討。

【方法】 調査対象は兵庫県内のホルスタイン種乳牛を飼養する3酪農場で、A農場2010年、B農場2013年、C農場2013年と2016年のRS流行を調査した。経産牛と育成牛の飼養頭数はそれぞれA農場56頭と42頭、B農場43頭と26頭、C農場（2013年）29頭と12頭、C農場（2016年）29頭と14頭。対応方法は検温と経過観察を中心とし、RS流行を疑った時点からできる限り治療せずに経過観察を目標とした。治療する場合は症状に応じて消炎剤と抗生物質使用を選択した。検温実施を診療とし、診療頭数、診療回数、体温39.5℃以上（以下発熱）の回数、分娩後日数を診療簿等、RS診療後の異動状況を個体整理簿から調査した。

【結果】 全ての流行でRSを発症しない年齢層（高年齢牛）が認められ、飼養頭数の20～33%を占めていた。発症を認めた年齢層のうち経産牛の診療頭数はA農場12頭、B農場15頭、C農場（2013年）4頭、C

農場（2016年）11頭で、抗生物質を使用しなかった頭数はそれぞれ11頭、11頭、3頭、7頭となり診療頭数に占める割合は92%、73%、75%、64%であった。育成牛においては、AとB農場は診療なし、C農場は2013年の1頭と2016年の3頭以外は診療なしで対応できた。流行時の肺炎による死産事故はなく、周産期事故により死産転帰を取った2頭と繁殖障害による譲渡1頭以外は1年以上搾乳牛として供用されていた。診療回数6回以上の9頭中8頭、4日以上発熱した9頭中6頭は産後120日以内の発症であった。抗生物質使用10頭中9頭は流行初日～3日目までに発症していた。

【考察】 流行時に発症する年齢層を調査することは、発症しない年齢層を観察対象からいち早く除外し、発症の可能性のある年齢層への重点的な観察を可能にするために重要な作業と考えられた。発症を認めた年齢層の経産牛診療では60%以上を抗生物質の使用なしで対応し、その後の牛群在籍状況も問題ないため、RS流行時には慎重な牛群観察によって抗生物質使用を控えた対応が可能であると考えられた。また、一般に成牛より若齢子牛でより症状が重篤化しやすいといわれるが、育成牛の治療はC農場の数頭のみで、経産牛と同様に食欲不振や発咳にあわてることなく慎重な観察によって、診療自体を減らすこと、捕獲や保定等の労力低減及び牛に対するストレス軽減も可能であると考えられた。抗生物質使用頻度の高かった産後120日以内の個体や流行初期に発症する個体は診療回数や発熱日数が多い傾向にあり、より注意深い観察が必要と思われた。経過観察や治療方法選択の客観的な判断基準や、治療しないことへの環境づくりが今後の検討課題と考えられた。